

浄土

1987-10

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 (運輸省 特別扱承認雑誌) 第三二五号
昭和六十二年九月二十五日印刷 昭和六十二年十月一日発行

第五十三卷

十月号





十月の秀句

橋くぐる鱸音こまかき秋日和

星野 立子

顔出せば一抹のこる秋没日

石田 波郷

お十夜の雨上りたる夕障子

永井 東門居

|| 十月号 ||

郷土の味



極楽国土には、かくのごとき功德
莊嚴を成就せり。

——『阿弥陀経』

目 次

法 話

十日十夜別時念仏について(上)……………宮 沢 善 弘……(2)

お十夜の頃……………藤 原 円 忠……(8)

=江戸物語=(9)

江戸大相撲……………細 田 隆 善……(13)

《読者のページ》

浄土教の価値と一念多念の解明……………上 野 浩……(26)

(木)(下)(隆)(一)(随)(筆)(集) <7>

海と山の狭間で

——男のロマン(1)——

……………木 下 隆 一 ……(29)

◇◇長篇連載小説◇◇

立ち止まるな善導 第40回

不老不死

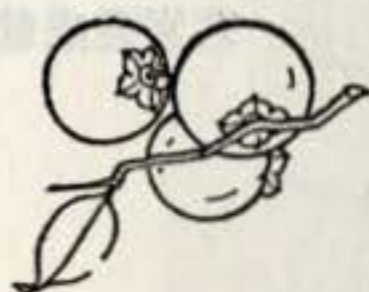
……………寺 内 大 吉……(35)

挿絵 松濤 達文

表紙絵「ほととぎす」 松浦春子画

(お) (十) (夜) (法) (話) [上]

十日十夜別時念仏について



宮^{みや} 沢^{ざわ} 善^{ぜん} 弘^{こう}

(横須賀市正観寺住職)

お十夜の法話をとのお薦めをいただき、いま筆を取りましたが、聴衆を前にしてするお説教の場合には「讃題^{さんだい}」と言いまして、これからお話しようとする事の表題を提示し、

その上で始めるのが普通のようにあります。私は何度か本誌の紙面で法話を致す機会を頂戴してまいりましたが、改^{あらた}まって讃題^{さんだい}と言^いい、冒頭^{きようたん}に、経論^{ぶんく}の文句を引用したことはな

いし、また、それらしいことを書いたこと
ありません。

これは、お話をするのではなく、書いた物
を読んでいただくのでそうしているという訳
ではないのです。

先ずはひとつ「讃題」をお唱えする例を示
してみましよう。

さんだい——（讃題）
謹んで拝読し奉る「仏説無量寿経」に曰く、

此に於て善を修むること十日十夜すれば、
他方諸仏の国土に於て、善をなすこと千
歳するに勝れたり。本日は皆様、お忙が
しいところをお十夜にお参り下さいまし
て……云云。（以上）

私は考えるところがあつて、あまりこうい
う風には始めないのであります。

讃題を唱えることが悪いなど思っている
のではなくて、お説教の初はこうでなく、は
ならぬと、形式的に決めないだけの事であり
ます。浄土宗ではお念仏のことについてお話
すればよく、外の話をする訳ではない。強い
て内容を言うなら、「唯往生極樂の爲には、
南無阿弥陀仏と申して、疑いなく往生するぞ
と思ひとりて申す」お念仏、または、「三心
四修と申すことの候は、皆決定して南無阿弥
陀仏にて往生するぞと思ううちにこもる」お
念仏について申し上げるのでありますから、
あえて形式に拘らず、「皆さん今日はよくお
参り下さいました。これからお十夜のお話を
始めようと思ひますが、先ずはアミダ様に
挨拶を申し上げてから始めます。お手をお合
せ下さい。ナムアミダブツと十遍お称え致し
ましょう」と始める方が氣樂で自分に合うと
思うだけです。

これから冒頭で讃題を申さぬ時は左様ご理解下さるようお願い致します。

さて、今年も早いものでお十夜の時節になりました。

十月の十五日が阿弥陀さまのご縁日なので、十月から十一月にかけて、日本の多くの浄土宗寺院でお十夜が厳修まるのであります。

浄土宗においてお十夜が行われた最初の寺は鎌倉の光明寺で、今日では十月の十二日の夕方から十五日の早朝までがここでの十日十夜法要の期間となっています。

十三日は法主ご親修、十四日は唱導師で、それぞれ主たる日中法要が賑やかに奉修され、夜分も参詣者は引きも切らずという程の大法要会であります。

唱導師と申すのは宗内ご縁のある高位の僧

が、法主に代って法要の導師を勤める時、そう呼称する尊称と思っただけによろしいのですが、この外にも別な意味での使い方がありますので、ちょっと申し上げてみましょう。

その場合は唱導師と一語に考えず、唱導・師と二語の合成と考える方がよろしいようです。

禅宗などでは、唱導は禅宗の外他宗の人を指すと聞いたことがあります。これは特殊な例として、本来は仏さまや菩薩さまが法門を唱説して諸種の人々を仏道に導き入れることを唱導という、と辞書で説明しているのを見ると、これは仏・菩薩の行為というのが第一義のようであります。仏・菩薩が甚深微妙なるお悟りの内証（内心・内容）を、言語や態度を用いて私たちに現わされるのがお導き（外用）であるから、唱導・師の師は、仏・

菩薩の導き^{みちび}を、自らの体験を通して人に伝える人師^{じんし}（先達^{せんだつ}）のことで、分かり易く、説法する人のことだというのはその意味に依るからであります。

これを浄土門において考えると。弥陀の本願^{がん}のありがたさや、弥陀の導き^{みちび}の尊とさを人に伝え、自ら口称念仏^{くしょうねんぶつ}の先達^{せんだつ}を仕めることであります。こういう行為は化導^{けどう}と呼ばれるものであります。

化導とは、人を教えて念仏信者に変^か（化）え、仏・菩薩の導き^{みちび}を正しく伝える、つまり教化、伝導^{でんどう}のことです。伝道^{でんどう}ということばが一般では使われますが、私は頑^{かたくな}に伝導^{でんどう}で押し通して来しました。自坊で発行する檀家向け冊子「和順^{わじゆん}」は年四回定期に出してすでに三十八年、そこでは「仏教伝導誌^{でんどうし}」で通して来しました。

昔、檀家の人から、伝道^{でんどう}ではないのですか、

と聞かれました。当寺は浄土宗ですからアミダさまのお導き^{みちび}を伝えると考えて下さい、という、キリスト教では伝道^{でんどう}でしょう、という応え^{こた}です。キリスト教のことは知りませんが、道^{みち}は仏道^{ぶつどう}のことでお釈迦様のお悟り^{さとけ}です。仏の悟り^{さと}の内^{うち}を伝えることば出来ないと申す。この話は沙汰止みになりました。因^{ちなみ}に広辞苑においては伝道^{でんどう}に仏教的な意味の付加^{つけくわ}えを避けています。流石^{さすが}に、宜^{むべ}なるかなと思います。

浄土宗辞典では、唱導^{しょうどう}の語は死語^{しご}となると述べておりますが、生語^{なまご}への実質的な復権を期待したいものです。

さて、かつて私は、師父から「お十夜の説教程^{せきぎょう}難しいものはない」と言われたことがあります。

十夜の説教など話すことは決まっています。それ程難しいことはない、と思っていました。それから四十年近く経った今日では、むしろ大いに気掛りな事となっています。終生を布教一途に励んで終わった師父のことばの通り、易しいと思ったお十夜の説教が、実は一番難しいものであることが判って来たからであります。

今こして思うと、若い頃は、平気で「浄土宗のお十夜は……」などと広言しましたが、本当に浄土宗におけるお十夜のお話が出来たのであろうか、誠に汗顔の至り、唯自責の念で駆られるばかりです。

正直に言って、この頃は、お十夜のお話をする時、元祖法然さまはどのようにお聞きになっ
ていらっしやるだろうか、と、どこかで元祖さまがじっと見ていらっしやるような面映さを感じます。

浄土宗のお十夜などと皆さんにお話しているが、肝心なところがさっぱり繋がっていないではないか、もっとしっかり勉強して、浄土宗の正しいお説教をなささい、と厳しいお諭を受けそうで、それを畏れています。

さて、その肝心なところを、これから追い皆さんと一緒に考えてみようと思います。が、糸口にここで二つのポイントを明らかにしておこうと思います。

先ず第一は、一応、浄土宗と十夜法要との関わりは、元祖さまご入寂の後二百年以上も過ぎてから生じたということです。一応と申しましたのは、十夜法要は後土御門天皇勅許の法要ではありますが、勅許であるからという
ことで浄土宗はストレートに頂戴できたのかどうか。

宗義と照し、頂く態勢づくりを当時宗としてしたのであろうか。繋りとはそこところ

の問題であります。

第二は、十夜法要の起源は現世利益（この世での息災や延命などの利益を願う）であつて、そこでの中心である阿弥陀如来さまは浄土宗宗徒が南無阿弥陀仏と口称念仏する如来さまと同じなのか、という問題であります。

仮令ば、あなたが既に篤信の念仏者で、私がお十夜でお会いできたら、「今日はお十夜の日でございますね」とあいさつを交し、私は、あなたと共に木魚を打って心ゆくまでお念仏を称えて終わることが出来るでしょう。

お十夜の日であるという心の落着きはありませんが、たく頂戴しても、お十夜の由来や意義などを、今さら語る必要は更に感じないでしより。いかに歴史や伝統を諷（うた）つても、それなるが故の尊とさとは別に、念仏の集いとしてのお

十夜が私たちをいかに念仏願行に馳（か）り立てるか。そこに意義があり法要と言うに値する中身があると思うのであります。

唯（ただ）もうす 外（ほか）に口伝も相伝もなきが浄土の口伝相伝。

形式の美しさなどは二の次、三の次。願共（がんぐ）諸衆生（しよしうじやう）――皆でもろ共に――往生浄土の願行具足（がんぎよく）を目差して南無と称え阿弥陀と称名する。この一筋をお十夜がどう支（さ）えるか。

禅（ぜん）が只管打坐（しかんたざ）ならば、浄土宗は、只管念仏（ただねんぶつ）あるのみであります。

以上は問題解決へのアプローチであります。偏（ひと）に、元祖さまの御心（みこころ）に溯（さかのぼ）り、そのみ声を聞いて、自信教人信（じしんきやうにんしん）（自ら信じ人にすすめる）の外（ほか）はありません。

（つづく）

(法)

(話)

お十夜の頃



今年は夏が長く感じられて、漸くという
思いで秋が廻って来た。

夏の暑苦しきから、序々に解放され
て、空気も澄んで、空気がおいしく成っ

て来る。

私は、農家の多い地域で育ったせい
か、秋には稲藁を燃やす煙や、藤葉を焚
く煙の、白く起ち上がって紫色に薄れて

藤^{ふじ}原^{わら}円^{えん}忠^{ちゆう}

(市原市無量寺住職)

消え行く景色がなつかしいが、最近では生活の周りに化学製の物質が増えて、何かを燃やすと、黒煙を巻き上げるような煙ばかりが目につく。

澄んだ煙はあきらめても、青く澄んだ空の下に、木犀の花の香り、ほととぎす草の控え目な花、つばぶきの黄色い花、リンドウの紫色の見事さ、垣根等には山茶若の花、一寸奥まった影に秋海棠が弱々しいがあでやかな紅色のやや淡い花を咲き競い、街中どこを歩いても、どこからか菊の香りがして来る。そんな感じで秋は深まって行く、

秋の夕陽を眺めで、心の中に何かしら暖かいものを感じると、忘れていた心の中のでる里に自分が帰って来たような思いにひたる。

九月のお彼岸が、お寺にとって秋の予告であれば、お十夜はお寺にとって秋をしめくくる最も重要な法務である。

浄土宗のお寺では、戦前はほとんどのお寺がお十夜法要を営んでいた、と聞か、戦争中やその前後に、お十夜法要を営まなくなったお寺も少なく無い。そういう寺でも戦後世情が安定するに合わせ、お十夜法要を再開されたお寺も多い。そういうお寺では、お十夜法要の意味をどのように、改めて見直されたのだろうか、関心のあるところである。

私のお寺では、本尊様のお開帳をする。諷誦文を唱える等して初十夜はつじゅうやの霊のご回向と、檀家各家の先亡霊のご回向は他寺とほぼ同じだろう。お十夜は一日の法要だがその前の十日間を、夜住職一人

が本尊様を礼拝することとしている。

近隣の或るお寺さんでは、「ふだんは、クドクドと阿弥陀様に勝手なお願いばかりしているんだから、年に一日くらい、何も言わずにただ感謝の誠を表わす日があっても良いだろう。その一日が、お十夜だよ、とお檀家さんに教えられている」という。

又或るお寺さんは、「阿弥陀様への感謝と、収穫に対する自然への感謝の日だから、お檀家さんは、何か秋の味覚なり何なりを持ち寄り、法要後にみんなが持ち寄ったものを分け合って食べながら、お話しをしましょう」と指導されている。又或るお寺さんは、「阿弥陀様への感謝のお祭りだから、法要の後はカラオケでも福引でも賑やかにやりましょう」と指導されているという。

それぞれに意義のある受け止め方だと思ふ。

さて、お十夜法要が、いかなる因縁によつて浄土宗の各寺々で営なまれるようになったか、という事を考えて見よう。今から約千百五十年程前、慈覚大師が中国へ渡り仏道修学をされた時に、極樂の八功德池の水の音を感得して、お経や念仏に節をつけて唱える事を修得されたという。

大師が修業中に聴きとられた「極樂の八功德池の水音」は、おそらく耳で聴くというより心に伝わる音律であつたと思われるが、いかなる思いで大師はこの法樂に浸られた事であらうか。その思いの万分の一なりとも味わって見たいと思う

のだが、なかなか凡愚の身には得難いものである。

慈覺大師が日本に帰られて、自作の阿彌陀仏の御像を京都東山にある真如堂に祀り、阿彌陀經と南無阿彌陀仏のお念仏を、音節をつけてお唱えになって、供養の法要を営なまれたのが、日本で「お十夜」という法要が始まる、大きな因となったのである。

今から約五百五十年程前、平貞国が自分の不運を嘆き、若くして世捨人となろうと思い世捨人になる前に真如堂で三日三晩の間念仏を修したところ、夢のお告げによって世捨人となる事を思い止まり、人生社会での明るいご縁が急に開けた事から、更に感謝の念仏と合わせて十日十夜念仏に及んだ由来も有名である。

更に約五十年後に、鎌倉材木座にある

浄土宗大本山光明寺の祐崇上人が、後土御門天皇に招かれ、京都の宮中で阿称陀經の講義をされ、京都の真如堂で音節をつけたお念仏を修したことから、御土御門天皇が、「十夜」の法要は浄土宗の大事な行事としなさい、という勅許受下された。これが大きな縁となって、現在では、浄土宗の各寺々が、この法要を大事に修して、檀信徒と共に護り伝えて今日の大きな結果となっている。

しかし、慈覺大師が仏道修業のため中国に渡られて極樂の八功德池の水音を感じ得られた事や、平貞国の深い悩みと大いなる喜び、御土御門天皇の御叡慮や、祐崇上人の念仏行に徹した徳望の誉れ、等々によって、一つの形を表わしたお十夜法要も、その根底には、無量寿經の「此の世の生命ある内に、善を修することが

十日十夜あれば、仏の国にある者が千日千夜善を修するよりも勝れたことである」という教えが導きとなつてゐることに違ひはない。

この身体、この生命ある内に善を修めて、我が心、我が霊を聖き方に向かう為の力づけ方向づけをしておこう。その努力と修業が、有縁の先に亡くなつた親近な者達の霊の冥福にも役立って欲しい、という思いが、この法要を約五百年、毎年処々方々の浄土宗のお寺でお十夜法要を行なわせ、護り通して来た、という事も言えるだろう。

私は阿弥陀如来の御慈悲に御縁を結ぶことが出来る事に感謝し、一寺の住職として今年も又お十夜法要を務め、檀信徒

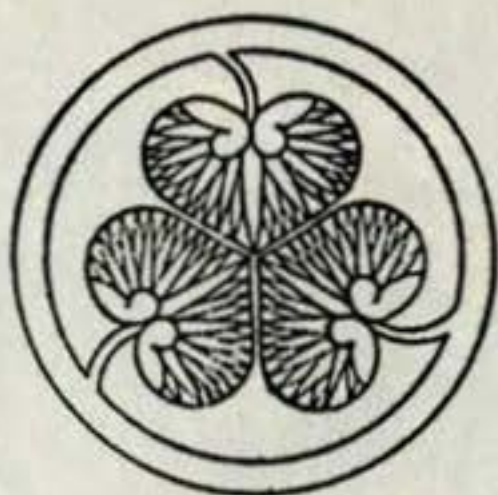
各家の先亡霊位のご回向を務める心算だが、今一つ心に掛る教えの言葉がある。「愚かなるものは、牛の如く老ゆ、かれの肉は増せども、かれの智は増すことなし」という法句經の警告の教えを心に重く受け止めておきたい。

歳愈々人生の中頃を超え、私なりに、世渡りの知はやや増えたようだ。しかし、心聖らかになる、仏の教えたもうところの智は、果して増しただろうか、と反省する。

到らざるところ多きの故に、お十夜法要には改めて阿弥陀如来におすがりする。そのおすがりする心こそが、南無阿弥陀仏であり、阿弥陀如来の御心に叶う生き方であらうとも思う。

江戸物語

(9)



江戸大相撲

細田隆善

(俳号・豊明)

江戸の人氣は江戸大相撲、江戸歌舞伎、江戸の花町（吉原と深川）の三つに集中した。また江戸の寄席も盛んであった。それらに共通するのは茶屋を通して入ることであり、桝席ますせきであったことも共通である。現在もその影響が若干残っている。現在の六場所、全国の大相撲は江戸の勧進大相撲に始まる。寛永元年（一六二四）初代横綱赤石志賀之助あかししがのすけが四谷の笹寺ささでら（新宿区）において晴天六日間の勧進大相撲を興行したのが、江戸大相撲の最初であ

江戸は全国総城下町
江戸は世界一の人口
江戸は日本の縮図
江戸で日本の富の半ばが消費
江戸文化の出現

る。勧進は神社寺院の境内において興行し、その収入の一部を社寺に寄付するものをいう。江戸の初期は、社寺



——河津三郎と股野五郎の対決（国芳画）——

の建設が多く、勸進興行がしばしば行われた。しかし勸進興行の取締令がときどき出たのは、その弊害が少なくなかったからである。貞享元年（一六八四）寺社奉行本田淡路守の許可を得て毎年、富岡八幡宮（江東区）の境内において勸進大相撲を興行することになった。当時相撲は武道の一つ、八幡宮の祭神が武勇の神であるので富岡八幡宮で興行されてきた。当時大相撲は春秋二場所、晴天八日間の興行であったが、安永七年（一七七八）から晴天十日間が許された。江戸の大相撲は二階建て、三階建て、数千の人々が集り、熱気にみなぎったのである。

相撲の歴史は古く古代社会から盛んであった。モンゴルをはじめアジア各地においても古くから行われてきた。相撲は古来、子供から大人まで草相撲などで楽しんできた民族スポーツである。古事記にタケミカヅチノカミとタケミナカタノカミとが出雲（島根県）の浜で力競べをして国譲りをしたことが記されている。また日本書紀によると当麻蹶速と野見宿禰が対決し、宿禰が勝ったことが記されている。以来、宿禰は相撲の元祖とされ、各地に宿禰神社があつて相撲の神社とされてきた。聖武天皇の神亀三年（七二六）から相撲は節会相撲といつて宮中の儀式の中に取り入れられた。ほかの儀式は全て着衣するが相撲は裸であるので、素舞ふから相撲の語が出来たともつたえるが「すまふ」は「争う」が語源のようである。相撲は宮中から庶民の間に盛んになり、武家社会の鎌倉時代になると、相撲は武術として尊重されるようになり、源頼朝も相撲



——慶応二年の江戸大相撲（国芳画）

両国回向院境内・三階建て相撲小屋
鬼面山、陣幕、不知火、小野川が出
陣数千人の観衆で埋まる——

を好み相撲を盛んにした。曾我兄弟の父の河津三郎と俣野五郎が頼朝公御前相撲において、俣野が負け河津を殺した。これが原因で建久四年（一一九三）富士裾野の仇討となったのである。室町時代になると職業力士が輩出するようになり、力士は諸国を巡業し、そのころから土俵が考案された。織田信長も大の相撲好きでしばしば大相撲を開催し、優勝者には弓を与えた。これが弓取式ゆみとりしきの始めである。豊臣秀吉も相撲が好き、太閤記の三十六番御前大相撲の六助は「彦山権現誓助剣」の芝居になったほどである。それは天明六年（一七八七）大阪で初演された。

江戸時代になると相撲は興行化されてますます盛んとなりレジャーの一つとなった。職業力士の数も増え、大名がバックとなる抱え力士も多く輩出した。職業力士は江戸を筆頭に、大阪と京都に集中していた。また力士の取締りと相撲興行を管理する相撲会所かいしよが出来た。現在の相撲協会である。江戸の大相撲は貞享元年から寛政三年（一七九一）まで富岡八幡宮境内で興行され、寛政三年以降は両国の回向院（墨田区）の境内で興行されるようになった。富岡八幡宮で興行された百年間の大相撲が、土



——座頭と女の相撲（「玉磨青砥銭」—寛政二年）——

俵、行司、四本柱など現在の相撲組織が完成したことから相撲史上貴重な時代であった。江戸時代は横綱の数がきわめて少ない。横綱十二人に過ぎなかったのは、十年、二十年横綱ブランクの時代があり、現在の横綱は江戸時代の大関に当るからである。当時の横綱は大関の中でも特に優れた技量と品格に与えられた称号であるからであった。無敵を誇った大関雷電^{らいでん}が右衛門は対手を齧折^{さばお}で殺してしまったことがあるので、横綱になれなかったと伝えている。おんな相撲は禁止されたがしばしば行われた。以下江戸時代の歴代横綱のプロフィールを紹介して、現在の大相撲の元となった江戸大相撲を眺めることとする。

初代明石志賀之助は寛永の大力士、宇都宮（栃木県）の藩士山内主膳の子というがさだかでない。寛永元年（一六二四）上野寛永寺（台東区）の地壇祭に、力士仁王仁太夫^{におうじんだゆう}と四肢^{しご}を踏み、ついで四谷笹寺の勧進大相撲に、六日間全勝したのが、勧進大相撲の最初であるという。翌年には京都において後水尾天皇の天覧相撲に出場したことはあるが生年没年不詳である。宇都宮市の蒲生神社に初代横綱の碑がある。江戸の俠客、夢の市郎兵衛が初代横綱



——谷風と小野川の仕切り（春章画）——

を常々助けたことが伝えられている。

享保二年（一七二七）二代横綱になった綾川五郎次は栃木市の生れ、六尺二寸、四十四貫、江戸の名人力士であったが大阪でも名声であった。綾川の墓は栃木市の定願寺にあり、同市の太平山神社に綾川の力石が残っている。芝居講談の成田利生記は、綾川の弟子の桂川力蔵が成田山不動尊に祈願して怪力を授かり、父の仇を土俵で投げ殺して討ったという。

享保十八年（一七三三）三代横綱になった丸山権太左衛門は宮城県の登米に生れ、六尺五寸、四十三貫、頭に瘤があった。仙台藩主伊達侯に支援されたという。江戸俳壇の雄、雪中庵蓼太に句を学び丸山の句が残っている。寛延二年（一七四九）長崎巡業中没し、同寺の皓台寺に墓がある。享年三十七歳。

横綱にはならなかったが、明和年間巨人力士、釈迦ヶ嶽は七尺四寸八分、四十三貫、一尺二寸五分の草鞋をはいたという。釈迦ヶ嶽は出雲（島根県）の紺屋の家に生れ、長じて雷電為右衛門の弟子になった。相撲中巨人であるばかりでなく美男であり、二階の窓から豆腐を買った、煙草の火を借りたという。雲州松平侯の抱え力士で



——陣幕久五郎と雷電為右衛門の対決
(春英画) ——

あった。安永三年（一七七四）二十七歳の若さで没し天明二年（一七八二）実弟の真鶴咲右衛門が等身大の円柱の碑を富岡八幡宮に建立し、碑文を雲州の学者、天愚孔平が書いたのが同社に現在している。

寛政元年（一七八九）四代横綱となった谷風梶之助^{たにかぜのかじのすけ}は六尺二寸五分、四十三貫、その大足袋に一升五合の米が入ったという。仙台の出身、先祖は地侍^{じざむらい}、江戸に出て角界入り、寛政七年（一七九五）没するまで二十七年間大活躍し、四十四場所の中で黒星はわずかに十四、谷風は六十三連勝を記録した。谷風は江戸力士の中でも強いばかりでなく、容貌はおだやか、温厚な性質、風格もよく相撲史上最高の力士といわれた。同年に横綱となった小野川との対決は寛政相撲の黄金時代を築くものとなった。小野川との対決は、谷風六勝、小野川三勝、無勝負三回、引分け二四、預り二四と記録されている。この二人の対決は江戸の市民を最高に湧かせたのである。谷風は寛政七年（一七九五）江戸で流行した感冒にかかって没した。享年四十一歳、この風邪のことは江戸では「谷風」といった。谷風の碑と墓は仙台市の東漸寺にある。

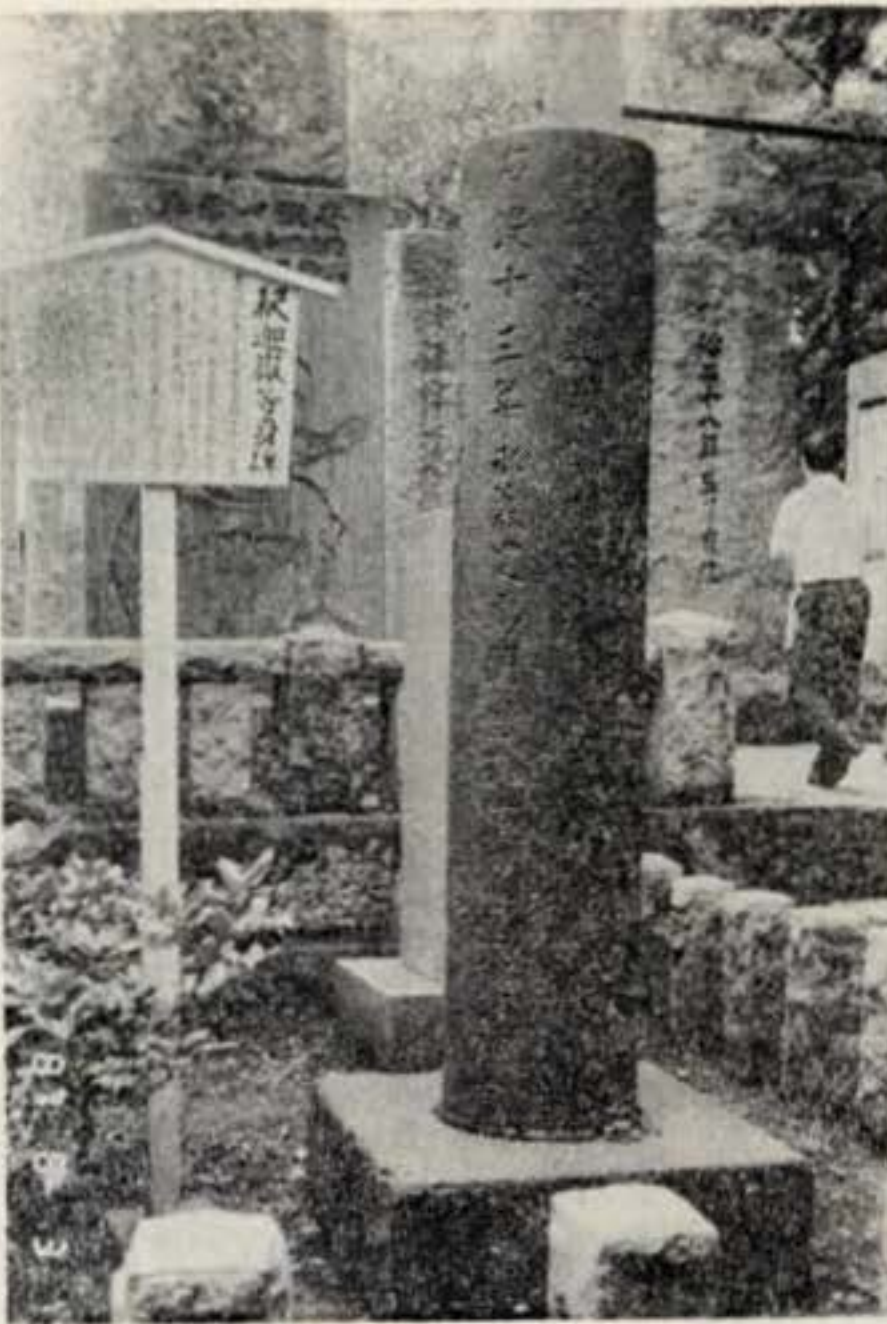
五代横綱小野川喜三郎は、宝暦八年（一七五八）近江膳

所（大津市）に生れ、五尺八寸、三十八貫の美男力士であった。寛政元年（一七八九）谷風とともに横綱となり、五代目となった。久留米藩主有馬侯の抱え力士なり谷風との対決は有名であったが、谷風なきあと雷電為右衛門との対決が江戸市民を湧せたのである。寛政二年（一七九〇）雷電との対決に有馬侯から「雷電に負けたら余の前に出るな」といわれた。しかし小野川はこれに負けてしまい母はそのため自殺したという。小野川は惜しくて牛ヶ淵（港区）で雷電を待ち伏せ殺そうとして刃を交えたところでは仲裁されて引き上げた。その後増上寺（港区）火災の際、消防の任に当った有馬侯の消防隊がかけつけ、小野川はこれに協力して、靈廟から厨子^{ずし}などをかつぎ出して大活躍した。講談で小野川が火の見櫓にて有馬の猫退治をする話が伝わっている。文化三年（一八〇六）四十九歳で没し、増上寺地徳院に葬られたが墓は現在なくなっていた。

小野川横綱引退後三十一年間、横綱はなかったが、文政十一年（一八二五）阿武ノ松^{あぶのまつ}六代横綱になった。阿武ノ松は奥能登（石川県）の農家に生れ、一升飯を食べるので追われて江戸に出た。柳橋（中央区）のこんにやく屋に奉

公し角界に入った。のちこのこんにやく屋が困窮したのでこれ
を助けたという。長州藩主毛利侯の抱え力士であったが、嘉永
四年（一八五二）六十一歳で没し、江東区の玉泉院に墓が現存し
ている。

六代横綱阿武ノ松と好取組で江戸を湧かした七代横綱稲妻雷
五郎は、寛政七年（一七九五）常陸（茨城県）に生れ、角界に入
り、雲州侯の抱え力士となって活躍し、文政十三年（一八三〇）
横綱となった。力士には珍らしく八十八歳の長寿を完うして、



—— 釈迦ヶ嶽等身石碑（江東区深川・富岡八幡宮） ——



—— 横綱力士碑（深川・富岡八幡宮） ——

三十	二十九	二十八	二十七	二十六	二十五	二十四	二十三	二十二	二十一	二十	十九	十八	十七	十六	十五	十四	十三	十二	十一	十	九	八	七	六	五	四	三	二	初
代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代
西ノ海	宮城山	大錦山	大錦山	大錦山	西ノ海	鳳ノ海	大木戸	太刀山	若嶺	梅ヶ谷	常陸山	大砲	小錦	西ノ海	梅ヶ谷	境川	鬼面山	陣幕	不知火	雲龍	秀ノ山	不知火	稲妻	阿武松	小野川	谷風	丸山	綾川	明石
嘉治郎	福松	大五郎	卯守也	卯守也	嘉治郎	谷五郎	森右衛門	右衛門	森右衛門	森右衛門	森右衛門	森右衛門	八十吉	嘉治郎	森右衛門	森右衛門	久五郎	久五郎	久五郎	久五郎	久五郎	久五郎	久五郎	久五郎	久五郎	久五郎	久五郎	久五郎	久五郎
鹿兒島	岩手	愛知	大坂	大坂	大坂	大坂	大坂	大坂	大坂	大坂	大坂	大坂	大坂	大坂	大坂	大坂	大坂	大坂	大坂	大坂	大坂	大坂	大坂	大坂	大坂	大坂	大坂	大坂	大坂
大正一二年	大正一二年	大正一二年	大正一二年	大正一二年	大正一二年	大正一二年	大正一二年	大正一二年	大正一二年	大正一二年	大正一二年	大正一二年	大正一二年	大正一二年	大正一二年	大正一二年	大正一二年	大正一二年	大正一二年	大正一二年	大正一二年	大正一二年	大正一二年	大正一二年	大正一二年	大正一二年	大正一二年	大正一二年	大正一二年

五十九	五十八	五十七	五十六	五十五	五十四	五十三	五十二	五十一	五十	四十九	四十八	四十七	四十六	四十五	四十四	四十三	四十二	四十一	四十	三十九	三十八	三十七	三十六	三十五	三十四	三十三	三十二	三十一
代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代
隆の里	千代の富士	三重ノ海	若乃花	北の湖	輪島	琴平	北の富士	玉の海	佐田ノ山	橋ノ海	大戸	柏戸	朝乃花	若乃花	橋ノ海	吉葉山	鏡里	千代の富士	東富士	前田山	照國	安芸ノ海	羽黒山	双葉山	男女ノ川	武蔵山	玉錦	常ノ花
俊英	剛司	剛司	剛司	剛司	剛司	剛司	剛司	剛司	剛司	剛司	剛司	剛司	剛司	剛司	剛司	剛司	剛司	剛司	剛司	剛司	剛司	剛司	剛司	剛司	剛司	剛司	剛司	剛司
青森	北海道	北海道	北海道	北海道	北海道	北海道	北海道	北海道	北海道	北海道	北海道	北海道	北海道	北海道	北海道	北海道	北海道	北海道	北海道	北海道	北海道	北海道	北海道	北海道	北海道	北海道	北海道	北海道
昭和五八年	昭和五六年	昭和五四年	昭和五三年	昭和五二年	昭和五一年	昭和五〇年	昭和四九年	昭和四八年	昭和四七年	昭和四六年	昭和四五年	昭和四四年	昭和四三年	昭和四二年	昭和四一年	昭和四〇年	昭和三九年	昭和三八年	昭和三七年	昭和三六年	昭和三五年	昭和三四年	昭和三三年	昭和三二年	昭和三一年	昭和三〇年	昭和二九年	昭和二八年

——横綱力士碑の横綱名

(五十九代横綱隆の里俊英まで)——

明治十年没し、新宿区の妙円寺に墓がある。

八代横綱不知火^{しらぬい}諸右衛門^{もろえもん}は享和元年（一八〇二）肥後不知火村（熊本県）に生れ、角界で活躍、雲州侯の抱え力士となつて活躍、のち細川侯の抱え力士となつた、五尺八寸、三十六貫。嘉永七年（一八五四）五十四歳で没した。

九代横綱秀ノ山^{ひでのやま}雷五郎は陸前（宮城県）の出身、雲州侯の抱え力士、小兵にして五尺四寸、四十二貫、弘化二年（一八四五）横綱になつた。文久二年（一八六二）五十六歳



大関力士碑（深川・富岡八幡宮）——

雪見山堅太夫	宝曆七年	刺山谷右衛門	天保十三年	大ノ里万助	大正十四年
白川関右衛門	宝曆七年	鏡岩浜之助	嘉永三年	能代湯錦作	昭和二年
御所浦磯右衛門	宝曆十年	小柳常吉	嘉永五年	常陸岩英太郎	昭和二年
大童子峰右衛門	宝曆十一年	猪王山森右衛門	安政三年	豊国福馬	昭和二年
荒瀬五太夫	宝曆十二年	階ヶ嶽右衛門	安政三年	清水川元吉	昭和七年
大鳴戸淀右衛門	宝曆十二年	境川浪右衛門	安政四年	鏡岩善四郎	昭和十二年
釈迦ヶ嶽雲右衛門	明和七年	象ヶ鼻平助	明治三年	五ツ峯名良男	昭和十六年
大渡門太夫	安永三年	段瀬川山左衛門	明治五年	名寄岩静男	昭和十八年
虹ヶ嶽袖右衛門	安永四年	雷電慶右衛門	明治十年	佐賀ノ花勝巳	昭和十九年
鷲ヶ浜音右衛門	安永七年	朝日嶽鶴之助	明治十年	汐ノ海運右衛門	昭和二十二年
九段竜清吉	天明七年	橋山久三郎	明治十四年	増位山大志郎	昭和二十四年
小野川喜三郎	寛政二年	大達羽左衛門	明治十九年	三根山隆司	昭和二十八年
鶴渡岡右衛門	寛政四年	一ノ矢原太郎	明治二十二年	大内山平吉	昭和三十一年
雷電為右衛門	寛政七年	大鳴門源右衛門	明治二十三年	松登屋郎	昭和三十一年
風谷五郎	文化十年	八幡山定吉	明治二十四年	琴ヶ浜貞雄	昭和三十三年
鉄石城五郎	文化十年	大戸平広吉	明治二十六年	若羽黒朋明	昭和三十四年
緋城力弥	文化十一年	大坂紋太郎	明治二十八年	北葉山英俊	昭和三十六年
玉垣頼之助	文化十一年	鳳凰馬五郎	明治三十年	柳光正之	昭和三十七年
柏戸利助	文化十二年	朝汐太郎	明治三十一年	豊山勝夫	昭和三十八年
千田川熊蔵	文化十二年	国見山悦吉	明治三十八年	清國勝男	昭和四十四年
有馬山竜右衛門	文政四年	荒岩龜之助	明治三十八年	前ノ山太郎	昭和四十五年
四賀峰重古	文政七年	駒ヶ嶽國力	明治四十年	大蔵鶴将能	昭和四十五年
源氏山綱五郎	文政八年	伊勢ノ浜慶太郎	大正三年	貴ノ花利彰	昭和四十七年
緋城力弥	天保四年	朝瀬太郎	大正四年	大受久晃	昭和四十八年
秋津風音右衛門	天保五年	九州山十郎	大正七年	魁傑将晃	昭和五十年
湖東山文右衛門	天保七年	千葉ヶ崎俊治	大正七年	旭国斗雄	昭和五十一年
追平風喜太郎	天保七年	対馬洋弥吉	大正八年	増位山太志郎	昭和五十五年
平石七太夫	天保十年	太刀光電右衛門	大正十二年		

——大関の碑の大関名

（横綱昇格と看板大関は除く）——

で没し、江東区の普門院に墓がある。

十代横綱雲竜久吉は筑後(福岡県)の農家に生れ、五尺九寸、三十六貫、怪力無双、江戸の人気力士となり、文久元年(一八六一)横綱となった。明治二十三年、六十八歳で没し、文京区の新蔵寺に墓がある。

十一代横綱不知火光右衛門は美男力士、八代横綱と同郷であってその門に入った。五尺八寸、三十三貫、文久



——巨人力士身長碑(深川・富岡八幡宮)——

三年(一八六三)横綱となった。明治十二年、六十六歳で没し、大阪市の遊行寺に墓がある。

江戸時代最後の横綱、十二代陣幕久五郎は文政十二年(一八二九)出雲に(島根県)生れ、阿波藩主蜂須賀侯の抱え力士、のち松江藩に召され、薩藩にも抱えられ西郷隆盛と親交があった。五尺七寸五分、三十七貫、慶応三年(一八六七)横綱となり、勤王力士として有名であり、相



——力士手形足形の碑(深川・富岡八幡宮)——

撲界発展に力を尽した功績は大きい。江戸大相撲発祥の地である富岡八幡宮に明治二十八年、横綱力士碑を建立した、歴代の横綱の名を刻したもので、中央の巨石は五千五百貫のみかげ石である。伊藤博文、田中光顕、大隅重信、安田善次郎など政財界人数十人の協力を得て建立したものである。初代から昭和五十八年、六十九代の隆の里まで横綱名が刻してあるが、その後の名は未だ追刻されていない。中央巨石の両袖に陣幕久五郎は不知火光右衛門の取組力士像が刻まれている。横綱にはならなかったが一代の強豪雷電為右衛門の名が欄外張り出しに刻してある。陣幕久五郎は明治三十六年、七十五歳で没した。

横綱力士碑は富岡八幡宮東側北部にあるが、昭和五十九年、同社入口大鳥居近くに、大関力士の碑が建立された。この歴代大関の碑には、横綱となった大関と名前だけの看板大関を除き、初代大関雪見山ゆきみさんから昭和五十五年大関になった増位山ますいさんまでの九十八人の大関名が刻されている。その後の大関は追刻することになっている。この大関の碑の両袖に巨人力士の身長碑と代表力士の手形足形の碑がそれぞれ建立されている。



——鎌倉時代の相撲行司・海老名源八（国貞画）——

相撲は明治、大正、昭和へと栄え、戦前戦後には衰えたが、その後また盛んとなり、さらに近年両国国技館をはじめ各地の相撲施設が立派になって、日本の平和と繁栄を象徴するかの如く相撲ブームを巻き起しているが、そのルーツは江戸勸進大相撲であった。

◎『維持会員』へのご加入のお願い

法然上人鑽仰会は月刊誌『浄土』を刊行しながら、法然上人の教えを宣揚し、念仏信仰の実践をしてまいりました。すでに『浄土』誌は五十三巻に入り、鑽仰会創立以来五十五年をけみしてきました。近年は、弊会の活動も、『浄土』誌の刊行が唯一の務めというように、まことに細々とした微力な努力に終始している状態です。しかも雑誌の発行自体も不手際や遺漏の多い作業で、愛読して預いております会員諸兄には、まことに申し訳ないかぎりであります。しかしともかくも『浄土』の灯を消すことなく、遅々とした歩みではございますが、今後とも一步一步前進してまいりたく、担当のもの、一層の精進をお誓いいたすところです。

つきましては、「年会費 金二万円」のご助成をもって、弊会の維持会員として月刊『浄土』刊行に暖かいご支援を賜わりたく、ここに心よりお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会

(読)(者)(の)(へ)(一)(ジ)

浄土教の価値と

一念多念の解明



上野の

浩

釈尊が仏教を開いてから今日まで、すでにながい年月が経過した。しかし仏教といえども多くの人間がそれに呼応してこそ、はじめてその価値が高まるものと考えられる。そしてその多くの大衆の眼からみたときは、私は仏教については、少くとも二つの大きな改革というか、あるいは大きな発見ということが行なわれたとしても、あやまりではないように思う。すなわち、その一つはインドの古い部派仏教から新しい大乘仏教が生れ出たことであり、もう一つは他力教義に法然上人がいと徹底した教えを発見され、これを打ち出したことをあげるのである。

その一つの部派仏教については、これは余りわが国では行なわれなかった仏教であるが、この仏教においては、いわゆる在家の大衆は仏道修行から疎外され、仏教への真の道は出家して僧になり、僧団にでもはいらねば困難となっていたのである。そしてその僧は、専心修学で、さとの境地に達することができるかもしれないが、みずからのさとりを独り楽しみ、その教えをその弟子に伝えるだけの独善主義者のそしりをまぬがれることはできなかった。これでは釈尊が強調し、実践してやま

なかった大慈悲心からの万人成仏は望むべくもなかったことになる。ここにおいてやがておこる在家者と出家者との、一体となつての仏教革新運動が在来の仏教を小乗と貶し、みずからの仏教を大乘と称せしめたのである。私はこの大乘仏教の興起を仏教上の一大改革としてい

る。ところで、大乘仏教の大きな目標とするところは万人成仏である。その根源となる修行方法を教えたのが浄土教である。すなわち、現世において阿弥陀仏を念じ、その力にすがつて、死後その阿弥陀仏の建設した浄土へ往生することができるといふ教である。そして大乘仏教の各種經典に登場する諸仏の数は殆んど無数に近いほどあるといわれているが、しかし浄土教といえは何時のころからか、阿弥陀仏を命ずることが最もさかんになってきた。

浄土教については、インド大乘仏教の興隆者、第二の仏陀ともいわれる竜樹は、十地經の注釈では、仏道修行には難行道と易行道との二つがあつて、これで一切の衆生をもれなく救済することができるとする。その難行道とは「ただこれ自力にして他力の持なし」と示し、易行

道とは「ただ信仏の因縁をもつて浄土に生まれんと願えば、仏の願力に乗じて、すなわちかの清浄土に往生するを得、仏の他力に住持せられて、すなわち大乘正定の聚に入る」とその価値を教えている。

さて、浄土教のうち、阿弥陀仏の浄土教を支想した名僧も多く、インドの馬鳴、竜樹、世親（天親）、中国においては廬山の慧遠、ついで曇鸞、道綽、そして中国浄土教の完成者といわれる善導、わが国においては空也、源信などをあげることができ、鎌倉時代に法然上人が出るに及んで、遂に大乘仏教の他力救済の、最高教説に到達したのである。この教義の発見を私は仏教上第二の大改革として評価しているのである。

ところで法然上人の教義というのは「いかなる人でも、何もむずかしい修行はいらない。ただ一声、南無阿弥陀仏と口に称えるだけで、死後極楽浄土に往生することができのだ」というのである。世にこれを専修念仏としてあがめている。

口に「南無阿弥陀仏」と称えさえすれば、浄土に往生

することができるといふ教えは、極めて偉大な教えである。それならば私共は今、口に称える念仏はただ一言でいいのか、あるいは二声でいいのか、また十声でいいのか、あるいは多数回称えなければならぬのかという疑問につきあたるはずである。

そのことを考える前に、まずここに信意の心もなく、ただ単に機械的に口で念仏を称えるだけのものについてはどうなのであろうか。この称名は仏の本願にかなっていない称名であつて、勿論、何等の効果もないものと知るべきである。これを無信単称という。

さて、浄土教の完成者法然上人は「南無阿弥陀仏」を称えるのは、一声でもよく、また何回でも同じことであると教える。親鸞はさらにはっきりと、一声だけで充分であると教える。しかし、それで充分なのであろうか。

法然上人の弟子の長樂寺隆寛は、「極楽往生をとげるために、往生の業因となる念仏を終生つづけなければならぬ」と多念義を主張した人物であるとされているが、「一念多念分別事」の著では、法然上人の本願念仏の教えは、一念と多念との何れにも偏することなき念仏往生の道であると述べている。また、法然上人の門弟幸西の

主張した説は、「一念によつて往生の業事が成るのであるから、その後の念仏は無用である」という徹底したものである。さらに經典をみると、観無量寿經の中に、下品下生の輩が称える「南無阿弥陀仏」は「十念(十回)」といつていふところからみても、仏教者はやはり多数回称えるにしかずといふことを考えるのではないであらうか。私共凡俗信者は迷う。

そこで私はこう考える。すなわち第一声の念仏は最も心のこもつた、最も熱のこもつた、最も力のある念仏であらうと思う。しかし第二回の念仏、第三回の念仏というように念仏を重ねる方がやはり信心の度は大きくなる。そう考えるのはあやまりであらうか。そして往生の業因となる念仏を「終生つづくべし」との、ある名僧の一言も私共の心にしみ透る。

京都に一寺があつて、百万遍の念仏に向つて修行している人々があるときく。念仏の回数を重ねて、信心の度を大きくしようとして努力しているのであらうか。これこそ私の胸をつよく打つ。

海と山の狭間で

—男のロマン(1)—

木^{きの}下^{した}隆^{りゅう}一^{いち}

昨年の十月十二日から五回、朝日新聞夕刊に連載された「中国、緑と土と」という畦倉実特派員の報告を、私は興味深く読んだ。いやある種の感慨をこめて読んだと言った方が当たっているかもしれない。先年「中国五大石窟巡り」のツアーに参加して敦煌まで行った時、大同から蘭州へ向かう車中で、初めて目にした砂漠の凄じさに呆然とした記憶が甦ったからである、砂漠については漠然とした概念はあったが、実物を目のあたりにする

と、そんなものは一遍にふっ飛んでしまった。鉄道のすぐ側まで迫った砂漠は強風に煽られて、砂丘の稜線は絶えず細かい砂を飛ばしていたし、風紋は刻々とその紋様を変えていた。見た目にはサラサラと砂が流れているだけだが、ここの砂漠四分の三は砂丘が動く移転砂漠で、一年間に十〜十五メートルの速さで、家や畠を埋めてしまうという。砂丘の斜面には格子縞の砂防が作られていて、鉄路の確保に懸命の努力が払われているのは分かったが、それが何で出来ているかまでは分からなかった。畦倉特派員によれば、それは麦藁で作られているという。「砂丘の斜面に麦藁を十センチの厚さに敷き並べ、真ん中を棒で押し込む。藁は二つに折れ、十センチは砂の中に、二十センチほどは表面に残る。こうして作った一メートルから八十センチ四方の麦藁の格子が、中国科学院蘭州砂漠研究所・沙坡頭野外実験センターの試験区の中に延々と続いた。ゆるやかな流砂であればこれで一応、動きが止まる。(後略)」これが一番安上がりで効果的な砂防法で、条件がよければ自然に草が生えてくるし、草や灌木の種子を播いたり、挿木をすることもある。中国ではかなり普及した方法であり、農地の近くの治砂には農民総出でこの作業に当たる、と彼は記している。

成程そういうものだったのかと、記事を読んで格子縞の砂防については納得したが、中国を旅行している時に、私にそんな知識があるはずはなく、ただ素人考えで、なぜ葛を植えないのかと不思議に思っただけだった。伊豆に住む私には、葛は極く身近な植物で、その繁殖力のしたたかさを十分承知していたからである。

實際梅雨が明ける頃から、葛は猛烈な勢いで生長する。電柱や樹木、火の見櫓にさえお構いなしに這い上がって行き、忽ちがんにじがらめにしてしまう。道路標識やガードレールに覆い被さって、役に立たなくするぐらいは朝飯前である。初秋、紅紫色の芳香を放つ小さい花を総状につける。藤の花を小さくしたような形でなかなか可憐であるが、藤の花が垂れ下がるのに反して、葛は上に向かって下から徐々に咲き上がって行く。しかし大きな葉に隠れるように咲くので、人の目にはつきにくい。葉は牛馬など家畜の飼料に、蔓状に伸びる茎からは丈夫な繊維が採れ、織られて葛布となる。また干した蔓は編まれて籠や行李に加工される。肥大した根からは良質の澱粉が採れ、葛粉或いは葛根と呼ばれて、今でも薬や食品の素材として珍重されているが、労働着などを作った葛布の方は需要が減って、静岡県の掛川辺りで細々と織られるだけになっていたが、民芸品として見直され、近年俄かに脚光を浴びている。

葛そのものについては、秋の七草の一つという程度の意識しかたく、花も花の馨も、伊豆に来るまでは全く知らなかった。しかし「くず」という言葉は、四歳か五歳の頃初代松旭齋天勝の舞台を見て以来、私の脳裏から離れたことはなかった。天勝一座は水芸を売物にした奇術師集団で、思いもよらぬところから突然水が噴き出す華麗な舞台には驚嘆したが、何かからくりがありそうなのは子供心にも感じとれた。今ならコンピュータで操作されるところを、当時は天勝の発するハッとオットとかいう掛け声がキーワードで、裏方が水の噴出を操作していたのであろう。水芸については、着物が濡れて冷めたいだろうと同

情したぐらいで、あまり鮮明な記憶はない。むしろその前座で行われた「葛の葉伝説」の舞台の方が印象は強烈であった。と言っても、白狐に紛した女性が口に銜えた筆で和歌を一首、懐紙に見立てた障子に書くといった他愛ないものであったが、これはからくりと違つてあくまでも演者の技術であるところが感動的だった。そして口上で述べられた「子別れ」ということが、私の幼心をいたく刺戟したのであった。昭和十一、十二年頃のことである。当時父は人絹会社の三原工場に勤務していた。経理担当で金庫の鍵を預っていたから、朝は早く出社したし、夜は夜で、新工場建設の根回しのため地元関係者の接待に追われ、連夜いわゆる午前様であった。だからその頃、私は父と遊んだ記憶はない。たまたま休みで家にいると、父は書齋にこもつて煎茶を入れ、難しい顔をして読書に耽っていた。体のいい母子家庭であった。そんな状態だったから、もしここで母と別れたらと自分の将来とだぶらせて余計心にしみたのであろうが、もう一つ、手を使わないであんなに上手に字が書けるなんてという思いが、訳も分からないまま「恋しくば尋ねきてみよ和泉なる信太の森のうらみ葛の葉」という和歌を覚え込ませてしまった。和泉の国、信太の森に住む白狐が恋をして、葛の葉という女に化けて土地の豪族で陰陽師であった安倍保名に嫁し、一子清明を設けたまではよかったが、ひょんなことから正体がばれて、泣く泣く清明にこの歌を残して去るといふのがこの物語の骨子である、安倍清明は平安時代の人で、我が国の陰陽道を完成した人とされているが、職業柄かなり謎の多い人物だったらしい。ちなみに、後鳥羽院の宸襟を悩ませた玉藻の前を、金毛企尾の狐と看破した安倍泰成は、清明七

代の遠孫と言われて今日に及んでいる。狐の血筋だったかち嗅ぎ分けられたのだと憶測されたりしているが、お話としてはいかにも尤もらしくよく出来ている。

特派員報告「中国、緑と土と」は、好個の読物として、久し振りに私を満足させた。ほんの一部分ではあったが、黄河の濁流とゴビ、砂漠、想像を絶する黄土の堆積を見た目には、とても他人事とは思えなかった。中でも「砂漠とハゲ山の黄河流域は、中国五千年の歴史が森林の破壊した結果です。人々は伐採を繰り返して森林を利用するだけで、管理と保護をしなかった。そのためどれほど高い代価を払ったことか」という。中国林学協会副理事長である王長富氏の発言がとても印象的だった。森林破壊が進みつつある現在の日本にとって、王氏の言は大変示唆に富んでいると思うからで、謙虚に受けとめたいものである。

この五回シリーズの連載が終わって十日ほどして、九月二十八日付けの朝日新聞の朝刊に、「黄色い巨竜に緑贈ろう／まず葛のタネを／黄河流域三十年計画／日本の子ら協力」と四本立のタイトルを打った記事が出た。「黄河流域の黄土地帯を日本の協力で緑化しよう。そのためには繁殖力の強い日本の葛のタネを子供たちに集めてもらい、中国へ送りたい」という、遠山正瑛鳥取大学名誉教授の言葉を伝えたものであった。計画は壮大且つ遠大で、まず蘭州のハゲ山五千ヘクタールを、葛の種子を播いて緑で覆うことから始め、そのあとに灌木を植え、更にその後、コノテガシワなどの常緑樹を植林するという三段構えの森づくりを三十年かけて進めるというのである。そして年内に約百キログラムの葛の積

子を集めて低温保存し、六十二年の春から甘肅省林業科学研究所を拠点にして種子播きを始める……。タイトルが大きい割には短い記事だったが、私には衝撃的で、快哉を叫びたい気持ちにさせられた。砂漠緑化の世界的権威である遠山博士と私の素人考えが、葛という一点で一致したからである。嬉しさのあまり、早速博士に、ご成功をお祈りします、とお手紙を差し上げた。下書きが見つからないので、今となつては何を書いたかさっぱり思ひ出せないが、それはファンレターかラブレターに近いものであつたような気がする。何しろ八十歳を超えた老学徒が、情熱を傾けて三十年計画で砂漠の緑化を企てているのである。私はその計画に男のロマンを感じたのであつた。

それから数日経つて、遠山博士から直筆のお手紙を頂いた、ご返事を頂こうなどとは露思つていなかった。秋雨に濡れて届いた文字のにじんだ封書を、私はしばらくの間珍奇なものを見る思ひで見つめていた。封を開くと、中味は趣意書で、博士の決意表明と、種子採取の協力要請、それに付随した種子の採取方法が述べられており、余白に「御協力の程をお願い申し上げます。ゴビ砂漠を歩いて益々私も緑化を推進する決意です。夢は沙漠をかけめぐっています」と添書きがしてあつた。サバクのサが砂でなく沙と書かれているのも嬉しかったが、博士の闊達な筆蹟に接して、私は一層強く男のロマンを感じ、かつて踏んだ蘭州の地に、遠く思ひを馳せた。

「丹藥の材料を届けてきた男です」

王徐明はこの前の訊問と同じ答えをした。

「殿中省をくまなく調べたけれど、あの晩そんな者は一人も出入りしていませんよ」

適当な言いのがれは通じない。殿中省は天子の身边に関する日常雑務を掌る役所だった。衣服、乗馬、車輿、医薬品など、すべてがふくまれる。

「……」

「誰なの。おっしゃい。それを言わないと、貴郎に失火の責任をとってもらわなくてはならないわ」

「天后さまの草稿を作り直せとおっしゃるんですか」

「あれはわたし以外、誰にも出来ないわ。わたしが焼けた分を補ってゆかなければなりません」

「では何をして責任を……」

「牢に入ってもらいます」

「牢ですか」

王徐明は武后をまともから凝視した。肉体の結びつきに一片の愛情でもあれば……と覗きこむ眼つきでもあった。

「いちばん奥の牢へ入ってもらいます」

武后は表情を微塵も崩さずに言った。

いちばん奥の牢がどんな場所なのか、王徐明はむろん知らない。でも苛酷な環境であることは充分に想像できる。

果たして自分の肉体がそんな牢獄の生活に耐え得るであろうか。

「天后さま」

「何ですか」

「申上げます」

「火を放った犯人の名を……」

「口が裂けても申しあげるわけにはまいりません。なぜならそれを告げたら、この王城が大混乱におちいることでしょう」

「混乱ぐらい恐れはしませんよ。こそこそ動きだしたネズムは一匹残らず搦め捕えねばりません」

「名前は申しませんが、天后さまがすぐ誰であつたか判る方法だけをうち明けます」

「言う気になっておくれだね」

ようやく武後の硬直した表情がほぐれてきた。

「肌をお借りしたいのです」

「肌を？わたしの肌を？」

「そこへ身を横たえて下さい」

王徐明は部屋の隅にある自分の寝台を指さした。武後は好色な期待を四肢の線へ露骨に描きながら寝台へ登った。

突差に思いついたのである。厭勝師から預っていた針と臘脂色をした軟膏だった。それが刺された相手にどんな効き目をもたらすのか。考えあぐねている余裕はなかった。

よしんば生命を奪う毒薬であつたとしても致し方のないことだ、と覚悟をきめた。

「これを肌へ凄します」

「ああ……針ねえ」

うつ前から武後の眼は恍惚感をただよわせ

ている。過去で味わった快楽を思いうかべたのであろう。

「どこへ刺しましょうか」

「ここよ」

と横臥の姿勢になると、着衣の裾をたくしあげて太腿の後ろ肉を手のひらで叩いた。

獣皮がくるんだ銀線のような針に貝殻の軟膏をたっぷり塗りこめた。王徐明は蜀の国でたっぶり「方士」の修業を積んできた。鍼灸の術は心得ている。刺しこむツボも承知していた。

針は武後の肥り肉の内部へ跡方もなく吸いこまれていった。このあと、どんな反応がおこるのだろうか。吉凶いずれにせよ、あのこただけは告げておかねばならないと思った。

「天后さま」

「なあに……」

快い睡夢がおとずれたのであろう。武後は溶け落ちそうな声を洩らしている。

「あの晩、私の部屋へ来た男は、かつて天后

さまにこの針をうった人物です」

「わたしに針をうった男……」

「天后さまは夢心地になって、快楽の絶頂をくり返し体験なさったそうではありませんか」

「ああ、あの明崇儼ね……わかったわ。どこからはいりこんできたんでしょう」

声から生氣は全く失われていた。

「あのときの快楽と比べて、どうですか。針の効き具合は？」

「ああ、いまのほうがずっと好い気持……わたし、もう眠くて」

「ゆっくりおやすみなさい」

「ねえ、しっかり抱いて。貴郎の腕のなかで眠らせて頂戴」

王徐明は言われるままに武後の傍らへ添い寝をした。だが全身がぐったりとなって、安らかな寝息をたてる彼女は、いつもの牡獣のような行動には移らなかった。ひたすら眠り続けるだけであった。

騰脂色をした軟膏の薬効は、深い睡夢へおとすだけなのであろうか。それとも……王徐明は不安に包まれて寝台をおりと、じっと安らかな寝顔に見入った。天后はこのまま再び目ざめることがないのではあるまいか。

しばらく立ちつくしたままの王徐明に、やがて決断が訪れた。今こそこの王宮を去るべきときがきた。天后との男女関係は言わずと知れたこと、すべてと絶縁すべきなのだ、と自分に言い聞かせた。

「先生、どこへゆくんですか」

斗姥閣を出ようとした廊下の端で呼び止められた。いつも形影の如く付きまとっている少年憚良であった。

「私は王宮を去る」

「天后は？」

「やすんでいる。ぐっすり眠っている」

「なぜ去るのですか」

「なぜと言って……いよいよ追い詰められた。私の立っている場所がなくなったように」

だ」

二人は王宮の東、延喜門をくぐり抜けて、宵闇の道を苑庭の方へ歩きだした。人影は全くない。王徐明は、武后が曲江の離宮から帰城して以来のあらましを告げた。少年は耳を傾けるだけで意見らしいものは一言もさしはさまなかった。方士が置かれた窮状は充分に理解できたのであろう。

憚良は、唯一点だけを危惧している。苑庭をよぎって、城外へ出る通化門の手前へきたとき足を止めた。

「王先生、自絶なさるおつもりではないでしょうね」

「……」

「すべてを諦めめるのは、未だ早いと思ひますよ」

十歳も年上の先輩みたいな口をきく。

「誰も傷つけないためには……ほかに方法があるのだろうか」

「それは知りません。おそらく罪人や処刑人

を出さないでこんどの問題は片づかないでしょう。それほど泥にまみれた争闘がくりひろげられています。そんな争闘と全く無関係な王先生が、なぜ死ななければならぬのでしようか」

「天后はあのままお目ざめにならないかもしれない……」

「王先生。そんなことは忘れて、あの門を出たら、まっすぐに和上のもとへいらっしゃい」

「和上のもとへ」

「未だあの實際寺にいらっしゃるはずです。同じ死ぬにしても和上に最後の説教を頂くのが得策ではないでしょうか」

まさにそのとおりであった。つい先日胸で誓ったばかりではないか。

——善導和上よ。釈尊の仏法も阿弥陀仏の慈悲とやらも信じきれないものがある。しかし私は貴僧のあとだけは蹤いてゆきます。貴僧のゆく道だけを歩きます。

十一

善導は、實際寺の庵室にこの前と同じような姿勢で坐っていた。道具箱で背中や腰を支え、机に向い、燈心の光りで写経に専念している。

暖かい眼差しで王徐明を迎え、適宜に質問をさしはさみながらこの方士が直面する現状を聴取した。しかし、これに対処する方法とか意見を善導はいっさい口にしなかった。

「釈尊が二十九歳で出家した話は、あんたも知っているね」

「はい、皇太子だった身分を捨ててお城を出たのでしたね」

「なぜ妻子まで捨てたのだろうか」

「生老病死の四大苦を、お城の門を出るたびに御覧になって、この世の無常をお感じになったからでしょう」

王徐明は幼い日、祖母からくり返しくり返し聞かされた「仏伝」を思いうかべていた。「四門出遊の話だね。でもその話、変だとは思わないかね」

「変だとは、どういうことですか」

王徐明はいぶかしげに善導を見つめた。この高德の僧は何を言い出すのか。

「釈尊がカピラ城を出たときは二十九歳ですよ。三十になんなんとする年齢ですよ」

「その年齢に間違いでもあるんですか」

「いや、間違いはない。三十近くにもなつて、今更世の無常をお感じになったのであるうか。二十歳前後の感じ易い若者ならともかく」

「そうですね」

「そして釈尊は並みすぐれた頭脳を持ち、世の中のことを何でもご存じだった」

「三十にもなれば、たいていの人間が人生の裏表を知りつくしますね」

「ヤシヨーダラという正妃を持ちゴービーと

いう第二夫人もいた。わが子ラーフラも生まれていた」

「出家の動機は何だったのでしょうか」

「王位です」

「王位？」

「父浄飯王の王位を継承する日が迫っていたからだ、とわたしは考えたい」

「それほどカピラ城主となるのが嫌だったのでしょうか。お逃げになったのですか」

「いや、逃げたのではないか」

「自分に王を継ぐ資格がないとでも思ったのでしょうか」

「それも違います。悉達多太子——釈尊はです、王というものにきびしくも高い理想をいだいていた。王は人民を一人残らず救わねばならない。病んだ者を助けねばならない。貧しさから解放しなければならぬ」

「釈尊は經典でそういうお考えを述べていらつしゃるんですか」

「直接には語っておられない。ただ本生経

(ジャータカ)を読むと、王や太子があるべき姿を、易しく明確に説いている。捨身飼虎、血飯を炊いた王……」

捨身飼虎の譬えとは、三人の兄弟王子が森を散歩していた。竹林へ至ると、その奥に大きな虎が疲れ果てた様子でうずくまっていた。虎の周囲には生まれたばかりの七匹の子供が飢えに泣いていた。

親虎はお産の疲労からか子供らに餌を与え、力を失った様子である。このままだといまにその親虎は子供を一匹づつ食べてしまいうちがいない。王子の兄弟はそんなことを語り合った。

いちばん末弟の薩埵太子は決意した。いったん竹林を離れ、兄たちを王城へ帰したあと親虎の前へ戻ってきた。わが身を虎の前へ投げ出して、その餌に供して死んだのである。

親虎は薩埵太子の肉を食べて体力を回復し、子供らの餌を求めに立ち上がることが出来た。

王や太子と人民との関係を端的に物語った寓話である。

ある国王は瀕死の病人を救うために、自分の血をしぼり出し、それで粥を炊いて食べさせた。六カ月も毎日続けた。病人は九死に一生を得て、元気に働くことが出来るようになった。

だが国王は貧血におちいり、永い期間病床で苦しまなければならなかった。

大金持になったその病人は、国王の恩をけろりと忘れ、あの王さまは自分の身体に悪い血が余っていたので、それを瀉血して粥を炊いてくれただけだ、と言いつらした。

「どんなに善政を施しても王は酬われない。国民のなかには無恩無酬の者もいる。これは王そのものにこびりついている原罪ではないでしょうか」

「原罪——」

「そうですよ。拭いがたい本然の罪悪です。人間が人間を統治する誤まりです」

「お釈迦さまはそのことに気づいていらしたのでしょうか」

「釈尊はカピラ城を出たあと、どこへゆかれたと思いますか」

「バラモン修行者の群れへ加わったと聞いています」

「そうです。耆那の街へゆかれた。そこは韋提希夫人の出生地で、商家が集っていた。王もいません」

「王がいないんですか」

「みんなで選んだ者を首長にし、その年限も定められていて、次の首長は別人が選ばれたります。だから修行者たちも王の命令や制約などを受けず、自由に学ぶことができた街なのです」

耆那——ジャイナ教である。その街はヴァーハスリイと呼ばれ、ヴァッジ人（モンゴル系と言われる）たちの首都であった。商業都市で、共和制が布かれていたことは大バリニッパーナ経（南伝・「涅槃経」）でも明らかである。そ

の巻頭でマガダ国王の阿闍世（韋提希夫人の息子）がヴァッジ族の攻略を釈尊に相談したとき、あの国はすべてを会議によって決定する政体で、マガダ国のような王権専制国家ではないから絶対に滅びない、と阿闍世の暴挙に釘をさしている。

カピラ城を出た釈尊は、バラモン教のなかでも自由を主唱したジャイナ教を学ぶべく、まっ先にヴァースリイの街へ出かけたのである。

「釈尊は理想の王道を歩むべく二十九歳まで研鑽にこれつとめ、立派なカピラ城主となるべく努力をかさねたと思います。だが王法そのものに矛盾があると気づいたのではないのでしょうか」

「どんな矛盾でしょうか」

「いろいろあるだろうが、最も顕著な矛盾はその権力が競争相手を捻じ伏せて擱んだものであること。捻じ伏せる力を少しでもゆるめたら、たちまち王座から転落してゆくという

ことです。この覇道の世界で人倫や慈愛が生き続けられるでしょうか」

「そのとおりですね」

「釈尊は逃げ出したのではなく正しい人倫や慈愛をこの世にひろめるためには王位は不適当だと判断されたんですね。不適当だけではない、有害でさえある」

善導が、釈尊出家の古事をおして何を言おうとしているのか。王徐明にもようやく理解できてきた。王権力そのものが持っている「原罪」みたいなものを強調したかったのであろう。それは、王徐明をとり巻くいまの環境を問わず語りのなかで言いあてようとしている。それでもなお質問をかさねないではおれなかった。則天武后の恐ろしい本性が毒蛇のような姿で迫ってくる幻影を瞬間に見たからである。

そんな王徐明の靈感度を洞察したかのように、

「涅槃経に毒蛇の譬えがある」

「毒蛇——」

「ある王が猛毒をふくむ大蛇を四匹、箱の中で飼っていた。何よりもだいじにして、これ無事に管理し終えた家臣は大臣に引き立てる制度を宮廷内にこしらえたほどでした」

十二

出世慾にかられた若者が、この毒蛇の管理を志願した。無事な管理とは、義務年限である二年間は絶対に蛇を怒らせないということであった。

簡単な仕事だと思いきや、この毒蛇ども、やたらに昂奮して怒り狂うのである。若者は汗みどろになって箱の蓋をおさえていなければならなかった。大事にこそ至らなかったが、毒蛇に咬まれることも一再ではない。

たまりかねて若者は仕事を放棄、王城を逃げ出した。それを知った王は怒り、五人の家

臣に命じて追わせた。

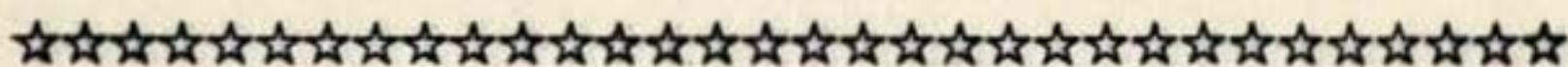
街外ずれの村へきて農家へ逃げこんだ。だが、そこも追手に包囲された。辛らくも農家の牛を歩き出させ、そのかげにかくれて脱出することが出来た。

村境まで逃げてきたが、ゆくてに大河がひろがっている。橋もなければ舟もない。村へ引き返すわけにもいかない。せっぱつまった若者は木片や枝を拾い集めてきて筏を作りはじめた。

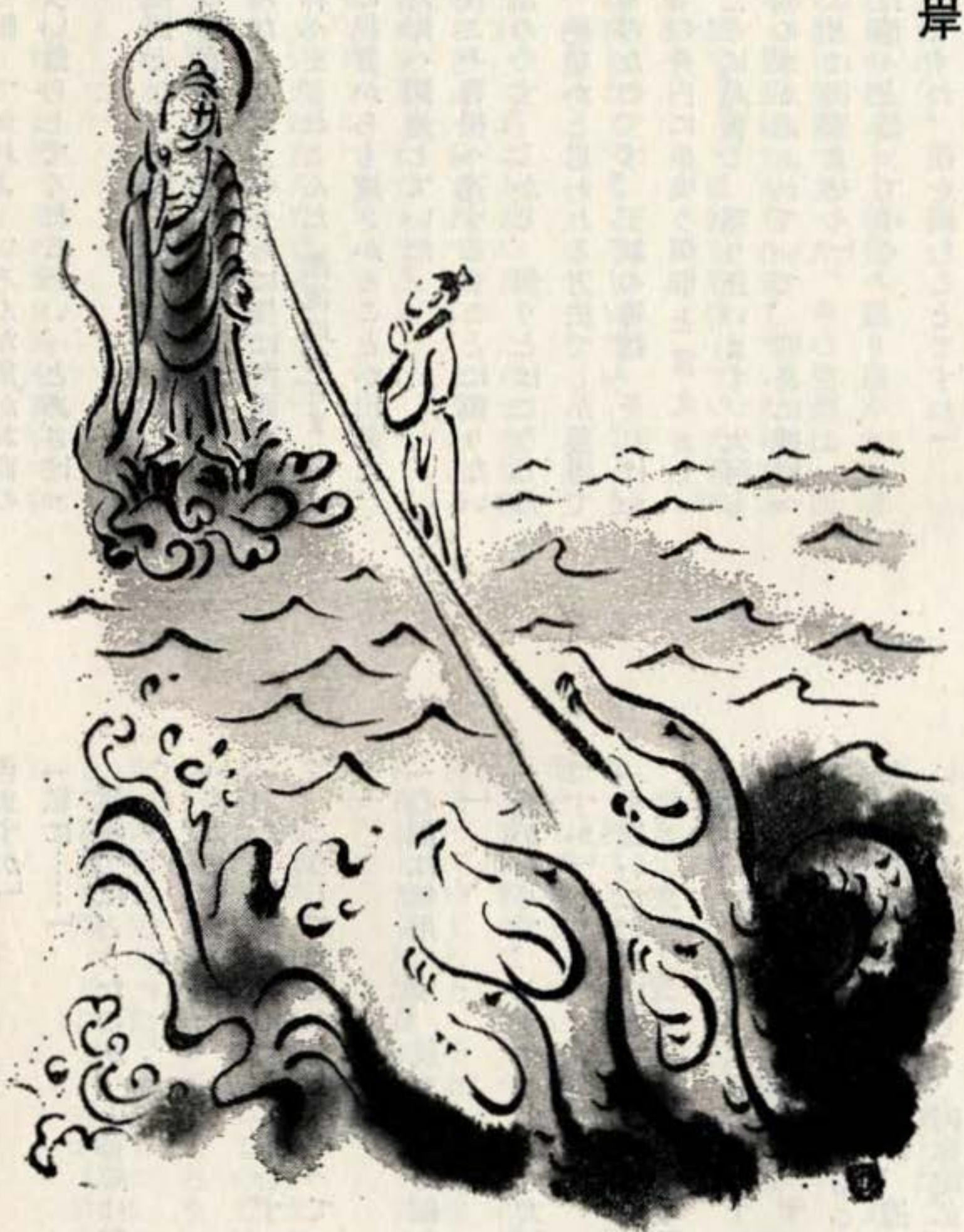
こんな小っぱけな筏でその濁流が乗り切れるだろうか。若者は大河を眺めやり筏に乗る気にはなれなかった。

迷っているうちに追手が姿を現した。さあ城へ帰るんだ、帰ったらあの毒蛇どもにたっぷり咬みつかせてやるからな、と洞喝しながら迫ってくる。

一刻のためらいも許されない。若者は筏を川面へ押し出した。激流に揉まれるさまを岸辺から眺めながら追手たちは笑った。水底で



对
岸



ゆっくり眠っておれよ、いろんな魚がお前の身体を喰い散らしてくれるわい、とあざけった。

筏は幾回となく転覆、沈没しそうななった。その都度若者は木片の擢で必死に漕いだ。そんなくり返しのうちに筏は河面に生い繁る樹林へまぎれこんだ。激流はおさまり、追手たちの視界からも遠ざかることが出来た。いつか対岸へ到達していた。

「この筏こそ菩提へ達するまことに頼りないよすがなのです。しかし、悟りとはこうした危険で、絶望かと思われる方法でしか獲得できないものなのです。王城の毒蛇、それはわたくしどもの身内に巣喰う煩惱と言えましよう。やたらに昂奮し、怒り狂います。大河もまた無明の水があふれていて、容易に彼岸へ達することは出来ません」

善導は淳々と語ってゆく。

「その筏ですね。筏を編むことですね」

「徐明よ、いまの貴郎にそれを編むことがで

きますか」

「私に……」

現状ではどうなのか、と善導は問いかけてくる。

「出来すまい」

「ああ、出来ません。とてもむずかしいので、こうして和上のもとへやってきたのです」

「心配は無用です。筏を自分で編む必要はない」

「筏がなくて、どうやってこの大河を渡るのですか」

「有難いことにひとすじの道が敷かれています」

「道が、ですって。水面に、ですか」

「それが易行他力の道ですよ。すでに阿弥陀仏の慈悲によって細くて、足もともおぼつかないけれど、唯ひとすじだけ、道が敷かれていますよ。そして、阿弥陀仏は対岸にお立ちになって、その道をまっしぐらに進んで

くる者を迎えて下さるのです」

「阿弥陀仏が？」

二河白道の教え——後世へ語り継がれた善導独自の教化原案であった。その発想は「涅槃経」の「篋四蛇」から由来していたのであろうか。篋(ぎょう)は蛇を収容していた箱の意味である。

「城へは帰らなくてもよろしいのでしょうか」

王徐明は、こわごわ訊いた。このまま帰城して、いさぎよく殺されて来い、と言われるかもしれないと思ったからである。

「此処にいなさい」

「なぜ、帰らねばならないんですよ」

「帰城する理由は全くありません」

「此処で写経をし、誦経をし、そして、たゆまずに念仏をとなえていなさい」

「わかりました」

「貴郎はもはや此所で柿の葉に詩を書いている必要はなくなりましたね」

「なくなりました。全くございません」

思えば長い間の迷いであった。もっと早く善導和上の膝下へ参ずるべきであった、と後悔さえしたくなる。

かくて王徐明は、善導の生前、最後の弟子となった。

平和で充実した毎日が続く。善導は惜しみなく持てる学識や論点を教えた。急速に念仏者として成長していった。

不安材料が二つあった。善導の衰えが日々深まってゆくこと、それと實際寺へゆくように指示した少年憚良が全く姿を見せないのがある。

長安城内でどんを變事が起ったのか。少年の身が危険にさらされているのではあるまいか。肉親であろうと少年であろうと容赦はない則天武后だった。確認したいのだが、城との絶縁を誓った以上、それもかなわなかった。

そんなある朝、同じ實際寺に止宿する学生

の一人が、西の市場で今日「処刑」が執行されることを王徐明に告げて、見物にゆかないか、と誘った。この学生は日ごろ書道の手ほどきを受けていたのである。

「どんな罪人だね」

「何でも首都を荒らしまわっていた盗賊で、金品をかすめるだけではなく、押し入った家人を縛りあげ、妻と娘とを問わず女と見ればすべて犯す凶悪漢だということですよ」

「強盗か」

ちょっと拍子抜けだった。てっきり政治犯で、太子李賢の一味と直感したからである。盗賊程度を街の広場へ引き出して公開処刑は近ごろ例がない。

王徐明は同行することを学生と約束した。すでに頭頂を僧形に丸め、黒衣をまとっている彼を、かつての宮廷方士だと見分ける者もいまい、と安心しきっていた。

午後おそく、じきに日も昏れようとする刻限、西の市場にはおびただしい群衆が集って

きた。王徐明も黒山の人垣に立ちまじり、広場中央に設けられた処刑台へ視線をそそいだ。

やがて頑丈な兵車が激しい軋しみをあげて到着した。ものものしい刑吏たちに護られて降り立った死刑囚を見て王徐明はハッと息をのんだ。

あの厭勝師、明崇儼ではないか。

盗賊などとはまっ赤な偽りだった。ではなぜ、かつての高官——朝散大夫にまで昇った明崇儼を盗賊などと触れまわったのであろうか。その疑問はじきに解明される。

「あの木にぶらさがろう」

王徐明は学生をうながした。ちょっと離れたところに大樹がそびえており太枝が張り出していた。あの太枝にぶらさがれば、処刑台がとっくり見られるはずであった。

(つづく)

◎読者の皆様へのお願

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもありますが、誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しくご協力下さいませ。

- 一、内容 自由（生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）
とめ下さい。
- 一、枚数 四百字詰用紙六〜九枚程度
- 一、締切 毎月五日

法然上人讃仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十三巻 十月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和六十二年九月二十五日 印刷

昭和六十二年十月一日 発行

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷所 長谷川印刷

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒一〇三 振替東京八一八二一八七番

五月書房選書

大正大学学長・文学博士
全日本煎茶道連盟顧問
装道きもの学院非常勤講師

安居香山 著

正坐の文化

◆煎茶道の文化とその思想◆

■永年にわたり書きためてきた、煎茶道・着物・花・正坐論を一冊にまとめ著者の日本の伝統文化観をここに開陳する。是非ご愛読下さいますようご案内申し上げます。

●推薦します●

黄 檗 宗 管 長
全日本煎茶道連盟会長
装道きもの学院 理事長
装道礼法学院

村 瀬 玄 妙 貌 下
山 中 典 士 先 生

■内容

- 一章 正坐の文化
- 二章 煎茶道の歴史と思想
- 三章 売茶翁に学ぶ
- 四章 茶道小論
- 五章 茶と旅
- 六章 茶事漫筆

■体裁

四六判／上製／口絵二頁 定価一、六〇〇円（十二五〇円）

五 月 書 店

〒101 東京都千代田区猿樂町二一六―五

電話 〇三―二三三―四一六一

振替 東京九一三三九四三

取引銀行 三菱銀行神保町支店

当座番号九〇二一四六三

第五十三卷 十月号

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 毎月一回一日発行
昭和六十二年九月二十五日印刷 昭和六十二年十月一日発行